

## 論文の要旨

論文題目 明治女性の西欧受容  
手仕事と服飾に見るモラルの変容  
氏名 香川 由紀子  
学位 博士(文学)  
授与年月日 平成20年9月30日

本研究では、明治日本における女性のモラルが西欧の影響を受けて変容していく様子を、手仕事や服飾にまつわる事象を通して考察した。明治の日本は開化政策により西欧的規範・文化を導入し、これに伴って女性の規範も大きく変化した。一方、日本がモデルとした西欧の規範も、国、時代ごとに様々な特色を見せている。近代化に際して日本女性が受容した西欧的モラルはいかなるものであったのか、そしてそれらは日本の土壌にどのように接木されていったのかという問題を、小説や雑誌に見られる手仕事と服飾に関わる言説の分析を通して、西欧と比較しつつ、以下の順序で明らかにした。

第1章ではまず、西欧における女性の手仕事の意味を検討した。西欧において手仕事は、屋内に籠って口を閉じ余計な想念を追い払う、ひいては 純潔 を守るという効果が期待され、古くから女性に課されてきた。実用品を生み、慈善事業にも適する手仕事は、勤勉・節儉 モラルを重んじたピューリタンにとってますます女性の重要な仕事とされていった。しかし近代に入ると、イギリスでは中産階級の台頭と共に、手仕事に託された厳格なキリスト教的モラルは中産階級の社会モラルへと移行する。その変容した姿を、19世紀から20世紀を代表する中産階級出身の女性作家、J.オースティン(1775-1817)、G.エリオット(1819-1880)、V.ウルフ(1882-1941)の作品に描かれた手仕事の情景を分析することによって示した。これらの小説では、手仕事は女性の 家庭 における位置と幸福を象徴するものとして描かれている。と同時に、イギリスの成熟した資本主義社会において、女性の手仕事モラルは宗教一辺倒のものではなく、おしゃべりや恋の楽しみを伴い、消費や社交をめぐる生活の中で目指される社会的モラルとなっている。中産階級の人々が消費文化に傾倒していく様子は、『ボヴァリー夫人』を始めとする19世紀フランス小説ではさらに顕著に描かれており、ここには既に 家庭 を廻る女性のモラルは消え失せて、華やかな物質文明に翻弄される女性の姿が浮き彫りにされていることも示した。

第2章以降では西欧の手仕事や服飾の各要素が日本の伝統にどのように接木され、どのような意味が新たに付されていったかについて考察した。第2章では、日本においても手仕事が婦徳を付して古くから女性に課されてきたものであり、明治の文明化・西欧化を迎えた後も、西欧の手仕事に付された婦徳を援用しつつその重要性が説かれ続けたことを、「女大学」の分析によって示した。また 貞節 を示し 家 を盛り立てていくという儒

教的婦徳に裏打ちされた伝統的な日本の手仕事が、新時代の教育と相俟って変化していく過程についても考察した。その結果、キリスト教主義女学校では洋風手仕事に合理性や節儉、勤勉、慈善といったピューリタンのモラルを付しておしゃべりの楽しみと共に教授し、儒教系女塾でも女性の家庭における性役割を強調して手仕事の目的に「家庭の幸福」を加えるなど、手仕事教育は種類もそこに付された意味も西欧の影響を受けて多分に変化したことが明らかになった。これらの新しいモラルは、手仕事を重んじてきた伝統的婦徳に接木されて日本の女学生たちに受け入れられていったのである。

第3章では家庭における女性の位置という大枠のテーマについて、女性に推奨された「交際」、西欧文化を伝える宣教師と受容する女学生の間で確執、家庭を象徴してきた手仕事に拮抗する学問という三つの点から論じた。明治の近代的女性モラルの形成は「文明化」と「キリスト教化」という二つの文脈で進められた。両者は、家庭の団欒を重視し、そこで重要な役割を担う者として女性を位置づけた点で一致していたが、「知的談話」による社会的に対等な女性同士の交際を求めた前者に対して、後者は女性の領分はあくまで家庭の中にあり、この領分を守ってよりよい人生を送るために女性同士が信仰を拠り所とする絆を結ぶことを主張した点で相違している。このことを福沢諭吉と巖本善治の論を分析することによって明らかにした。文明的モラルとピューリタンのモラルの葛藤は女学生自身の内にもあった。彼女たちはしばしば宣教師たちとの確執を経験している。このことは、女学生が宣教師たちの授けるピューリタンのモラルのみでなく、小説を通して成熟した資本主義を反映するイギリス中産階級文化を知るようになったことと関係していると言えよう。さらにこの読書という行為を含む女性の学問は、従来婦徳を脅かすものとして戒められ手仕事の対極に置かれてきたが、欧化主義期には読み書きによって思想を練ることまで理想とされたことについても考察を加えた。そして女学生の文芸は目新しさから一時的にもてはやされたものの理想の実現には至らず、女性の教養として再び手仕事が重視されるようになったこと、文章をしたため始めた女学生自身もこの思想に絡めとられ針の重要性を主張するようになったことを示した。しかしこの時点においては、手仕事のモラル面だけでなく実用面にも焦点が当てられるようになっていたことも明らかになった。

第4章では、手仕事の実用性によって女性が果たした産業と国家への貢献と、これと一見対極をなすものとして、産業化がもたらした女性のモード形成について論じた。産業化と日清・日露の二度の戦争は中産階級の女性たちに職業を持つことを要求した。しかし彼女たちの仕事は、賤しい労働と区別されなければならず、女らしさを示すものに限られていた。これに最適な職業として、手仕事が婦徳と共に再浮上する。

一方で産業化は消費社会を発達させ、女性たちは身を飾るようになった。手仕事もモラルを脱色した装飾品の製作が隆盛となり、若い女性独自のモードも生んだ。4章の後半では、変化する女性のモードをバルトの論を援用しつつ論じた。まず洋装について、最初に身に着けたのは欧化主義期に鹿鳴館外交を担った上流階級の女性たちと、彼女たちの対

極に位置する遊里の女性たちであったが、彼女たちの洋服は機能や構造の差異を取り払って一つのモードとして捉えられ、そのいずれもが日本がいかに文明化を遂げたかを示す制度イデオロギー的記号となったことを示した。次に女学生の袴が一種のステイタスシンボルとなっていたこと、その反面、親元を離れて自由に活動するようになった女学生に付された「ふしだら」、「墮落」のイメージシンボルともなって批判にさらされたことを示した。機能性から取り入れられた袴もまた実際の機能を離れ、作られたイメージによって制度／反制度志向の二極分化したモード現象となっていたのである。同じく女学生のモードとなったリボンは、百貨店の商業戦略や小説による宣伝効果によって、西欧的知識や経済力のある娘のシンボル、すなわち身分階層の差異化のイメージシンボルとなった。リボンは元来、フランス貴族男性の特権階級の徴であったが、明治日本においてもこれに通ずる意味を持つものとなったのである。さらに西欧文学においてしばしば恋愛の小道具として用いられたハンカチについても考察し、日本において、手仕事の文脈では中産階級女性に最適の「優雅」で「品がよい」ものと見なされたハンカチは、ファッションの文脈では「当世風」で「派手」な行動を好む娘たちの徴となり、また恋のきっかけを作る小道具となったことを示した。ハンカチが手仕事によってイギリスにおける中産階級の文化を示し、ファッションによってフランスにおける物質文明礼賛の消費文化を示していることは、服飾を通じた日本の西欧文化受容のあり方を端的に表しており、非常に興味深い現象と言えよう。

最後に終章では、第1章から第4章までを総括し、今後の課題と展望についても触れた。ジェンダーモラルを総体として考察する必要性のほか、女性の事象に関してもさらに分析すべき点は多く、女性の絆と階級の問題、ペンと針の対立、モードについても有効な研究方法を模索しつつ、さらに詳しく追求したい。